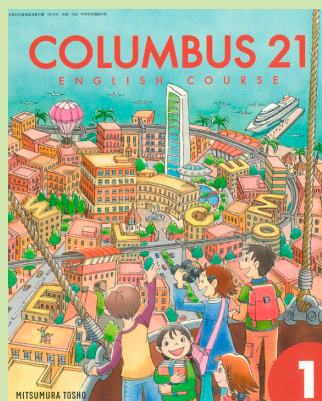


Here We Go!

実践ハンドブック vol.1

教科書に込める思い ————— p.2

太田 洋×西村秀之

Here We Go! 特別対談 ——— p.4

全国へ広がるラウンドシステム—p.10

小学校でもやっています! ——— p.16

先生方の疑問にお答えします ——— p.18



教科書に込める思い

ありがたいことに、教科書を作りたいという思いをもって、毎年何人もの新人が入社してくれます。「子どもたちに、知ることの楽しさや、できたことの喜びを伝えたい」と目を輝かせる彼らに、毎年同じ質問をします。

「教科書と一般書の違いは何だろう」。そうきくと、いろいろな答えが返ってきます。「教科書には、検定制度がある」「改訂の時期やサイクルが決められている」「学習指導要領をもとに作られる」。どれも正解です。ですが、自分は「作る側の言い分ではなく、読者の立場で考えたらどうだろう」とさらにきくようにしています。

一般書の読者は、その本を読むかどうかを自分で決めることができる。図書館や本屋にある一冊を手にとって、そこで読むか読まないか、買うか買わないかは自分が決められる。読み始めても「つまらない」と思ったら、そこでページを閉じることもできる。

でも、教科書は違います。授業の始まりに「さあ、〇ページを開いて」と先生に言われて、「僕は開かない」と言える子がいるのでしょうか。もしかして、心の中で「つまらない」と思っていたとしてもです。

「大事なことが書いてあるから」という理由だけでなく、どの子にも「早くページを開きたい」「もう一回開いてみたい」と思ってもらえる教科書。それを実現するのは簡単なことではないし、何度改訂に立ち会っても、そうそう成功したわけではありません。だけど、教科書作りを目指す新人たちには、それに挑む気持ちをもち続けてほしいと思います。

自分自身を振り返って、そのことを強く意識するようになったきっかけの一つに、平成5年度版英語教科書『COLUMBUS』が創刊された時に聞いた東後勝明先生（当時の代表編集委員）のお話があります。

「先生がポケットからペンをとって、What's this? と尋ねる。生徒の答えは、It's a pen. これって、おかしくないですか。だって、先生は答えを知ってい

るのに『これは何ですか?』って尋ねるんですよ。普段の生活で、こんなやり取りはしないでしょう。英語だから、外国語の勉強だから、これでいいんだと、あなた、そう思いますか?」

それまで考えたこともありませんでしたが、確かにそれでいいとは思わないし、英語の授業だから、知らない言葉を勉強するんだから「仕方ない」と言うてはいけない。そんな思いを強くもちました。

『COLUMBUS』は、平成14年から『COLUMBUS 21』に、令和3年から『Here We Go!』と書名を変え、時と共に、多くの子どもたちが手に取ってくれるようになりました。

「英語の授業を見学したら、グループに分かれた子どもたちが、教科書を見ながら、本当に楽しそうに話し合っていた」

「そうね。『ティナのこの気持ち、よくわかるなあ。わたしにも経験があるから』って言っていた子がいた」

「英語の教科書なのに、『この英語がわかる』じゃなくて、『この気持ちがわかる』なんて、ちょっとうれしいよね」

入社して何年か経った若手社員から、そんな言葉を聞くと、こちらまでうれしくなります。

ページを開く子どもたち一人一人の表情を想像しながら、あれこれ試して、工夫して、またやり直して……。創刊以来、ストーリーの可能性を信じて、子どもたちに「開いてみたい」と思ってもらうための挑戦が続いています。

だからこそ、教科書作りはおもしろい。ずいぶん長くこの仕事を続けていますが、そんな思いは今も変わりません。

光村図書出版株式会社
代表取締役社長
吉田直樹





太田 洋 × 西村秀之 Here We Go! 特別対談

『Here We Go!』（以下、HWG）のストーリーには、生徒の心をつかんで離さないリアルな表現や展開が詰まっています。子どもたちが自分自身の学びをデザインしていく「自律的学習者」の育成に向けて、教科書やストーリーをどのように活用していけばよいのでしょうか。編集委員の太田洋先生と西村秀之先生に語り合っていました。

子どもたちの 心に響く、 ストーリーの魅力

西村 HWGの特徴は、まず「子どもたちが教科書のセリフを真似する」ところだと思います。それだけ言葉が子どもたちに入っているんですね。

太田 その場面で学んだことを「ここでも使えるかな」と子どもたちが考えることができる。理解して活用したくなるということは、学び方としてとてもよいですね。そうしたくなる教科書がHWGです。そんな子どもたちの姿を見て、先生も一緒に楽しんでくれているので、どんどん話がつながっていく。

西村 小学校ではショウタというキャラクターが大人気で、彼のセリフを、子どもたちが日常会話でなりきって話しているシーンを見ます。中学生だけではなく小学生でもそんな様子が見られる。それだけ子どもたちがキャラクターに共感したり、自己投影したりしているのではないかなと思います。

太田 まさにそれです。ストーリーとキャラクターが魅力的だと、繰り返し学びたくなるんですね。言葉の学びは繰り返しが大切です。教科書のストーリーを単に何度も聞くのではなく、いろいろな活動を通して、「結果的に何度も聞いてしまった」、「聞いているうちに、だんだんわかっていくようになった」ということが、

とても大切だと私は思っています。中学校のHWGでは、本文音声に加えて、アニメと実写ドラマの両方が収録されていますが、どちらもあることで学習のバリエーションが広がりますよね。ある中学校の先生は、「子どもたちが授業をがんばったご褒美に実写ドラマを見せている」と言っていました。ご褒美って、「そんなもの、いつでも見られるのでは」と私は思っていますが（笑）。

西村 実写ドラマは多くの中学校でいちばんの人気コンテンツですよ。3年生のUnit 2「Our School Trip（修学旅行）」で、コウタが、バスにカメラを忘れたティナのために走るじゃないですか。実写ドラマでは「いよいよ走るぞ!」という場面で画面が切り替わってしまうので、子どもたちが「ああ…」とショックを受けていたのが印象的でした。アニメと実写ドラマを変えているので、それがまたおもしろい。実写ドラマは、そんな遊び心がたくさんあります。

太田 自分と同じ歳のキャラクターたち



3年生Unit 2「Our School Trip」
コウタがティナのために走るシーン

が、意見をきちんと持っているところが惹きつけられるのだと思います。修学旅行や合唱コンクール、部活などの様々な場面で、また、AIや環境問題などの様々な内容について、自分の意見を述べています。例えば、3年生のUnit 4「AI Technology and Language」では「AIについて自分の意見を書く」ことがゴールになっています。ストーリーの中で、キャラクターがそれぞれの意見を、それぞれの立場から発言している。ここでは、「では、あなたはと思う？」と教科書を活用して子どもたちに投げかけることができますよね。いきなり“What do you think?”と問われても、答えるのは難しい。そこで、「じゃあ自分の意見に近いのは誰？」ときくことで、答えやすくなっています。

西村 HWGは、キャラクターたちの会話を通して社会的な話題について自然に学んでいけますよね。あたかも友達が言ってい

るような意見を聞きながら、AIやSDGsなどに触れていくので、題材が自分にとって近く感じる。それはやはりHWGのよさですね。子どもたちは、学校や日常生活、社会問題についてキャラクターたちと語りながら、一緒に成長していくことができる。

太田 『COLUMBUS 21』※1のときから光村図書がずっと大切にしてきたのは、まさにキャラクターです。なぜキャラクターを作ったか。それは「目的・場面・状況」、「この場面だから、このようなことを思っている」という、必然性が大切だからです。ただ聞かせるだけではなく、その子の気持ちから意味を考えられるように、これまでずっと教科書を編集してきました。

西村 だから、光村図書のストーリーは言葉と心が離れない。「言葉と心が常に一緒にになっている」というのがまさに『COLUMBUS 21』からの流れなんですね。

太田 はい。子どもたちが、キャラクターに本当に興味を持ってくれる。キャラクターがいるかどうかで、子どもたちの学びへの集中度が全く変わってきます。それを生かした活動が、「なりきりリスニング」と「なりきりスピーキング」ですね。単なる音読ではない。初めは5ラウンド※2の活動の一つとしてやっていたものですが、今は全国でいろいろな先生方が取り組んでいますよね。

西村 「5ラウンド」、商標登録しておけばよかったです（笑）。

※1 『COLUMBUS 21』…HWGの前身となった、弊社中学校英語教科書。
※2 5ラウンド…1年間に教科書を5周する指導法。詳細はp.8～12「全国へ広がるラウンドシステム」へ

「なりきりリスニング」・「なりきりスピーキング」で得られる学習効果

太田 なぜ、「なりきり」を考えたのでしょうか。

西村 子どもたちが聞きたくなる仕掛けを作ったからです。「なりきりリスニング」は、自分のなりきりたいキャラクターを選ぶことがポイントです。ただ漠然と聞くのではなく、自分でキャラクターを選び、集中して聞くことで、意味だけでなく発言したキャラクターの気持ちを意識することができる。そのような効果を期待して取り組み始めました。子どもたちがキャラクターを選ぶときには、明らかに自分の好き嫌いが出てきます。ティナ派とか、ハジン派とか（笑）。キャラクターが立っているからこそ、こういった活動が効果的になりますね。

太田 そうですね。意味や気持ちを考えながら活動することはとても大切です。聞くことは、もちろん意味や気持ちを考える活動なのですが、さらに大切なのは、音読（読むこと）の際に意味や気持ちを考えることです。そこで、「なりきりスピーキング」が効果的なのだと思いますが、西村先生はどのように考えて取り組んでいたのですか。

西村 「なりきりスピーキング」では、まさに意味や気持ちを考えさせることを意図



おおた ひろし
太田 洋

東京家政大学教授
東京都生まれ。東京都の中学校、東京学芸大学附属世田谷中学校教諭、駒沢女子大学教授を経て、2014年より現職。光村図書小学校・中学校英語教科書『Here We Go!』編集委員。主な著書に、『英語の授業が変わる 50のポイント』（光村図書出版）、『これからの英語授業にひと工夫』（共著・大修館書店）などがある。

対談に登場する主なキャラクター



ショウタ

小学校教科書に登場。ひょうきん者で、おおらかで、食いしん坊。みんなを明るく盛り上げる存在。



コウタ

中学校教科書に登場。トランペットが得意。自分の意見を言うのはちょっと苦手。



ティナ

中学校教科書に登場。アメリカ出身。快活で責任感が強い。チャレンジ精神旺盛だが、頑張りすぎて疲れてしまうことも。

HWGのストーリーを彩る個性豊かなキャラクターの一覧はこちらからダウンロードいただけます。好きな食べ物や苦手なもの、豆知識など、ここでしか見られない情報が盛りだくさんです。ぜひ授業でご利用ください。





次代の担い手として、 「自律的学習者」を 育成するために

西村 子どもたちを見ていると、HWGはいわゆる「教科書」という捉えではなく、お気に入りの本という感覚なのではないかと思います。続きが気になるから、授業を待たず読みたくなる。

太田 そうですね。HWGには、これまで話してきたように、キャラクター性やストーリー性を生かしたさまざまな仕掛けがあり、だから「なりきり」などのいろいろな活動ができます。結果、言葉と意味が重なって、自然と言葉が自分のものになる。授業でのそうした体験を通して、子どもたちは学び方を学んでいきます。令和7年度版の教科書には、「英語の学び方ガイド」というコーナーがあります。これは、「リスニングやスピーキングの学び方は、どのようにしたらいいですか」という子どもたちのよくある質問に対して、「教科書の真似をしてみるのはいかがですか」とか、「基本文を自分のことに置き換えて話をしてみましょう」といった学び方の例やコツを提示したものです。これから英語教育で大切なのは、「自律的学習者」を育成することではないでしょうか。子どもが自分で判断して、自身の学びをデザインできることが大切です。

西村 子どもたちが教科書に興味がなかったら、教科書と学び方は乖離したものに

していました。全文を話せなくてよくて、1文だけでも、なりきって話す。キャラクターになりきるために、子どもたちはより注意して聞きますよね。そこで意味と気持ちがしっかり意識されます。だから全部を言えなくても構わないと考えています。意味と気持ちを考えながら聞いた後は、子どもたちは「そのセリフを言いたい!」という気持ちになるので、その1文を待って、一生懸命に音読します。

太田 ストーリーがあるからこそ、いわゆる「空読み」をしなくなるんですよね。「音読は大切だから、何度も練習しなければならない。」それが音読のいちばん危険な落とし穴です。何度練習したとしても、意味や気持ちを考えず音読している「空読み」は、英語の音とその意味が結びつきません。そうではなく、そのキャラクターになりきって音読をすることが、意味を考えることにつながるのではないかと、私は思います。

なってしまう。読み物のように、続きが気になるから自らページをめくりたくなる。学びたくなる。さらに、自主学習で困ったりつまづいたりしたとき、それを支えるために学び方ガイドがあるといった、2段階になっているんですね。

太田 そうです。だから授業での学びをきっかけに、家でも試してみる。そのサイクルが「**学び方を子どもに委ねる**」ことにつながります。そして、「学びを委ねる」ためには、先生方の具体的な支援や仕掛けといった、学び方のサポートが必要不可欠です。ぜひ、先生方も教科書のストーリーや学び方ガイドを活用し、子どもたちが自律的学習者となるために後押しをしていたきたいなと思います。

西村 我々は、自律した学習者を育てるた



めの第一歩となる教科書を、これからも考え続けたいですね。



英語の学び方ガイド

各学年の巻末に配置した「英語の学び方ガイド」。「音読をするときに、何を意識すればいいの?」「自分で英語の文を作るのが苦手です」といった、生徒のよくある学び方に関する質問や悩みに、具体的に答えます。





全国へ広がる ラウンドシステム

5ラウンド システム とは

拓殖大学教授
西村秀之

▼解説動画



5ラウンドシステム（以下、5ラウンド）とは、同じ教科書を年間で何度も繰り返し学習する指導法です。教科書を初めから順に1年間かけて学ぶのではなく、1年間で教科書の全ユニットを何度も繰り返し扱うことが最大の特徴です。

1 5ラウンドが具現化されるまで考えたこと

5ラウンドは授業改善であり、5巡ありきではありません。以下のようなことを考える中で結果として5巡となりました。

① 目指す生徒像、生徒の実態

「生徒が自分の言葉で自分の思いや考えを表現することができる」という姿を思い描き、どのような授業がよいか、ということを考えていました。

また、5ラウンドを考えたときの生徒は、教員が英語で話したことを何となく理解し楽しんでいる様子でした。当時、小学校5、6年で外国語活動が導入され、小学校で一定時間英語に触れてきた生徒でした。聞くことに慣れ親しんでいることを活かし中学校の授業への接続ができないか、と考えました。

② 言葉の学ばれ方

第二言語習得について分かっていることを授業に生かせないかということを考えていました。学ばれ方が分かっているのなら、それを授業に生かしていかないか、ということです。大量のインプットからアウトプットへの具現化を考えたのです。

③ 繰り返し触れる

一人の英語学習者として、英語を身につけていくには繰り返し触れることが大切だと感じています。これは多くの方が思うところだと思います。しかし、教科書を始めから扱ったときに二度と出合わない表現や語彙はかなりあります。家庭学習に返してということではなく、学校の授業で繰り返しを保障できないか、ということを考えていました。こうした主に3つのことを色々考え重なりあったところが、教科書を年間で5巡する「5ラウンド」として具現化に至ったのです(図1)。

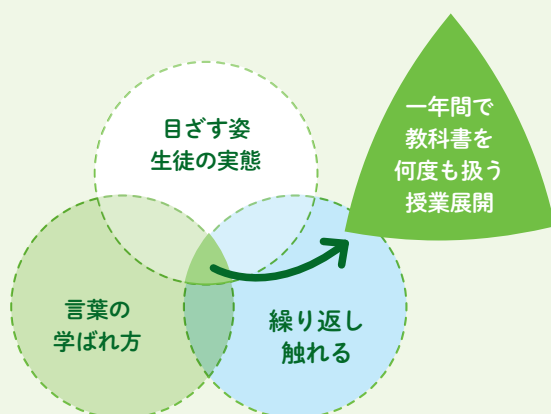
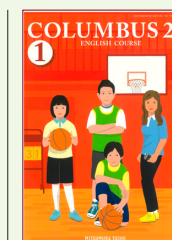


図1 5ラウンドの具現化

2 5ラウンドシステムの具体

① 教科書の扱い方

当時使用することになっていた教科書は『COLUMBUS 21』※1（HWGの前身）であり、現行版と同様ストーリーが特徴でした。ストーリーであるならば小説を何度も読み直す感覚で繰り返せる、と考えました。また、ユニット内のパートごととせず、量に対する力も育もうと、ユニットを通して扱うなどストーリーのよさを生かした授業計画となっていました。



※1 平成24年度版『COLUMBUS 21』。創刊以来、ストーリーとキャラクターを重視するコンセプト。

② 授業展開

1巡目は音声による内容理解、2巡目は音声情報と文とを結び付ける、3巡目は音読、4巡目は教科書本文に空所を設けたシートを用いての音読（穴あき音読）、5巡目はリテリング（自分の言葉で教科書のストーリーを伝える）を1、2か月周期で進めていきます(図2)。

③ 通常の授業との相違

一見、変わった授業展開に見えますが、教科書のユニットなどを扱うとき、内容理解→音読→プロダクションと展開されることが多いと思います。それを多くのインプットに、かつ生徒が繰り返し触れられるよう進め方を変えただけで、行っていることは変わりません。しかし、教科書本文に触れる回数は異なってきます(図3)。

④ 1時間の授業展開

1時間の授業では、繰り返し扱う教科書を軸にスモールトークをするなど、生徒が可能な限り英語を活用することが大切です。多くの先生が、冒頭に活用を踏まえた帯活動を行った後、教科書のラウンドへと進めています。

■ ユニットごとの授業展開



■ 5ラウンドの授業展開

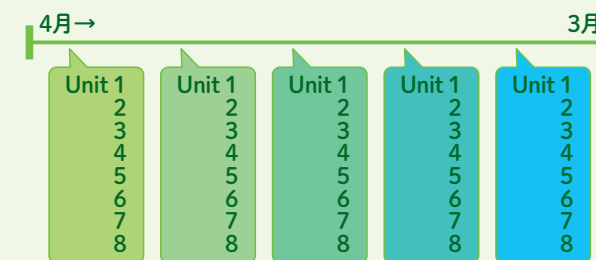


図2 5ラウンドの授業展開

4月→		(授業の進め方)						3月
4月↓	Unit 1	Unit 2	Unit 3	Unit 4	Unit 5	Unit 6	Unit 7	Unit 8
	内容理解	内容理解	内容理解	内容理解	内容理解	内容理解	内容理解	内容理解
	音読	音読	音読	音読	音読	音読	音読	音読
(5ラウンドの進め方)	プロダクション	プロダクション	プロダクション	プロダクション	プロダクション	プロダクション	プロダクション	プロダクション
	イン	イン	イン	イン	イン	イン	イン	イン
3月	イン	イン	イン	イン	イン	イン	イン	イン

図3 5ラウンドと通常の授業の相違

各ラウンドの展開例とは（中学校1年生の例）



【主な活動】
ピクチャー
オーダリング
【時数】
1.5時間～2時間

解説動画



リスニングを通じユニットの本文の概要をつかむ。

活 動	回 数	具体例
1 パーソナライズ		・ 教員とのやり取りなどを通じユニットのトピックを理解、自分自身の生活、体験と結び付け
2 内容 Q & A	1 ～ 2 回	・ 教科書のユニット全体の概要に関する Q & A
3 ピクチャー オーダリング	5 ～ 6 回	・ 黒板に順不同に掲示されているピクチャーカードを話の流れに沿った順番に並び替え ・ 内容について教員とのやり取りを通じて確認
4 なりきり リスニング	1 ～ 2 回	・ 登場人物の気持ちを考えながら自分の選んだ登場人物になりきってリスニング
5 なりきり スピーキング	1 ～ 2 回	・ 自分の選んだ一人の登場人物になりきって 1 か所でも同じタイミングで発話

ポイント 何度も音声聞き話の概要をつかんでいきますが、様々な活動は聞くための仕掛けになります。例えば、ピクチャーオーダリングは、確認段階で同じ箇所に異なるピクチャーが並ぶことも多々ありますが、だからこそもう一度聞く意味が生まれます。なりきりスピーキングは、シャドーイングができることが目的ではなく（うまくできたら素晴らしいですが）一緒に言うために注意して聞く、など単に「聞きましょう」ではない仕掛けが大切です。

本文の音声情報を文と結び付ける活動を行う。

活 動	回 数	具体例
1 ストーリーの 振り返り		・ 教員とのやり取りを通じ、そのユニットの概要、流れを振り返り
2 音作り	1 ～ 2 回	・ ランダムに並んだストーリーの文を見て、音の確認
3 センテンス オーダリング	5 ～ 6 回	・ 音声を聞きながら、ランダムに並んだ文に順番に沿い番号を記入。複数回聞いた後に確認
4 確認	1 ～ 2 回	・ 教科書の本文を見ながらリスニングをし、音情報と文字情報を確認

ポイント 音、文字の一致は難しいものです。活動は音情報と文字情報の一致ですが、その活動を踏まえ何度も本文を聞くことが意図するところになります。活動の際のリスニングは途中で止めることなく、一貫性のあるストーリーを最初から最後まで流します。多くの場合、生徒は聞き終えた後、教員からの“Do you want to listen to the story one more time?”の問いに勢いよく“Yes!”と答えてくる様子が見受けられます。

評価はどうする？

ラウンドだからといって特別なことはありません。学習評価は学校の授業を通じてどのような力がついたかを評価するものなので、授業を通じてついた力を見ることが大切です。→先生方の疑問にお答えします（Q1）【p.18】



【主な活動】
音読、ライティング
[書き写し]。

【時数】
2時間

解説動画



ラウンド1、2の活動を経て、音読に取り組む。

活 動	回 数	具体例
1 ストーリーの 振り返り		・ 教員とのピクチャーカードなどを用いたやり取りを通じ、そのユニットの概要、流れの振り返り
2 リスニング	1 ～ 2 回	・ 教科書の本文を見ながらリスニングをし、音情報と文字情報を確認
3 新出語彙の確認	5 ～ 6 回	・ ユニットで出てくる新出語彙を全体で発音し、リストを使用して個人、ペアなどで更に確認
4 コーラル リーディング	1 ～ 2 回	・ 教員の後に続いて音読
5 バズリーディング	1 ～ 2 回	・ 個人のペースで音読
6 一斉読み	1 ～ 2 回	・ 全員で音読
7 リスニング	1 ～ 2 回	・ 教科書の本文を見ながらリスニングをし、音の確認
8 オーバーラッピ ング	1 ～ 2 回	・ 音声と共に音読
9 オーバーラッピ ングマックス	1 ～ 2 回	・ リピート用音声を用いて音読
10 バズリーディング	2 ～ 3 回	・ 個人のペースで音読
11 一斉読み	1 ～ 2 回	・ 全員で音読
12 ライティング		・ 音声化できた教科書のストーリーを書き写す

ポイント 様々な読み方を取り入れ何度も音読に取り組めるようにしていきます。音読の合間には内容に関するQ & Aなどで、単なる音の再生にならぬよう、生徒が内容を意識したり、深めたりすることができるようにしていきます。一人一人の音読の状況把握し、デジタル教科書を活用するなど適切にサポートをしていくことが大切です。

教科書本文に空欄の設けられたシートを用い、表現、語彙を考えながら音読をする。

活 動	回 数	具体例
1 ストーリーの 振り返り		・ 教員とのピクチャーカードなどを用いたやり取りを通じ、そのユニットの概要、流れの振り返り
2 一斉読み	1 ～ 2 回	・ ラウンド3を踏まえ、教科書を音読
3 穴あき音読	8 ～ 10 回	・ 穴あきシートを用いてペアで音読（一人がシートを使い、一人が教科書で確認をしながら相手の音読を聞く。必要に応じてサポートなど）
4 ライティング	1 ～ 2 回	・ 穴あきシートを見て、空欄を補充しながらノートに本文を書く

ポイント 空欄の語彙や表現を考えながら音読に取り組みますが、完璧に言えることを求めているわけではありません。うまく言えなければ、教科書に戻り音読を行ったり、確認をしたりした後にまた取り組む、などインプットの上塗り意識していきます。



【主な活動】
穴あき音読
【時数】
2～2.5時間

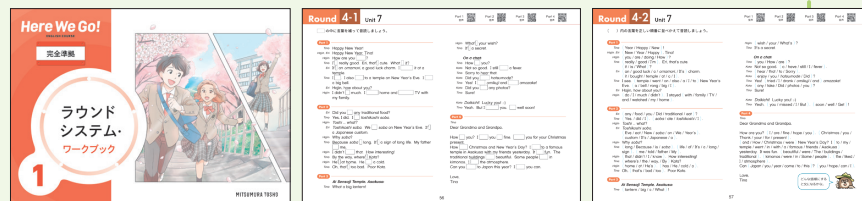
解説動画



ラウンド 4 で使用するワークシートの例

『ラウンドシステム・ワークブック 1』
(光村図書) p.56-57

▶『ラウンドシステム・ワークブック』のサンプルはこちらからご覧ください。



様々なラウンドシステムのかたち

英語を楽しく学ぶ

ー特別支援学級でのラウンドシステムー

本校では特別支援学級で「ラウンドシステム」を取り入れた授業を進めています。従来の授業の進め方では、時間を要することが多く、せっかく生徒の意欲がかき立てられて楽しむことができる教科書内容となっているのに、年度の後半では十分に落とし込むことができていないと感じたことがありました。そこで、教科書内容を満遍なく扱うことのできる「ラウンドシステム」で授業を進めることを決めました。授業進度はやはり時間を要することが多いので、ラウンド3を終えるまでを指導計画として設定しています（進度によりラウンド4も）。インプットを繰り返すことで、少しずつ教科書の内容を捉えることができたり、音と文字が一致してくることで英語を読めることに喜びを感じたり、キャラクターの性格を分析してみたり、少しずつではありますが興味を持って楽しんで「英語」に触れることができるようになっていきます。

「ラウンドシステム」による授業改善で生徒の姿がこんなに変わった！

「英語で自分の思いを伝え合う力を身につける」。これは、多くの先生が理想としていらっしゃると思います。私も努力し、継続して取り組んではきましたが、思い描いていたものとはほど遠いものでした。『Here We Go!』を使い始めてから「実技試験」としてStory-Retellingを取り入れました。未知の世界でした。練習と発表を繰り返すうちに、内容をより豊かにしようと、生徒の学習態度が変わっていききました。教科書の内容を生徒と教師とで英語で確認することで、生徒の表現は広がっていききました。現在では、Story-Retellingで使う表現をより正確に身につけ、教科書の内容をより深く読み取ろうと、音読活動だけではなく対話活動への意欲も高くなり、熱心に活動しています。一生懸命に活動する生徒の姿を見るたびに、授業改善し続ける勇気が湧いてきます。次は何をしたら、もっと生徒の英語力が高まるのか、英語好きな生徒を増やすには何をしたらいいのか。試行錯誤の毎日ですが、悩むことがとても楽しいです。

何度も触れたストーリーを自分の言葉で伝え合う。

活動	回数	具体例
1 ストーリーの振り返り		・教員とのピクチャーカードなどを用いたやり取りを通じ、その単元の話の概要、流れの振り返り
2 音読もしくは穴あき音読	1～2回	・教科書の本文を音読
3 ストーリーを考える		・ピクチャーカードを見ながら、どのように伝えるか考える
4 リテリング	3～5回	・ペア、グループなど相手を変えながら、振り返りを挟みリテリング
5 ALT によるリテリング	1～2回	・ALT のモデルを聞いたり、読んだりし、より言い表すのに適切な語彙や表現をつかむ
6 ストーリーを考える		・ピクチャーカードを見ながら、どのように伝えるか考える。
7 リテリング	3～5回	・ペア、グループなど相手を変えながら、振り返りを挟みリテリング
8 ライティング		・自分の伝えたストーリーをノートに書く

ポイント 生徒と確認をするのは、“○○ says ～（本文の表現そのまま）.”は使用しない、ということです。それ以外はそれぞれの生徒が繰り返すを通じ培ってきたもので自由に表現していきます。生徒の表現を注意深くモニターし、全体での共有につなげるなどしていきます。

途中で生徒が言いたいだろう表現を組み入れたALTのリテリングを聞く、もしくは読む機会を設定するなどし、伝えたいことに近づけていきます。

文法指導のタイミングは？

生徒が繰り返し英語を使う中で、様子を見ながら短い確認、整理を状況に応じて行っていくことが大切です。文法指導を行うタイミングは、特に1年生はラウンド3以降（文字が出てくるタイミング）が良いでしょう。

→先生方の疑問にお答えします（Q2）【p.18】

市川三郷町立六郷中学校
こばやしゅうひ
小林雄飛



小林先生の
年間指導計画はこちら



※詳しい年間指導計画は
QRコードから
ご覧いただけます。

川崎市立有馬中学校
つちやまさのり
土屋雅徳



土屋先生の
年間指導計画はこちら



ラウンドシステムの
授業内容はこちら





小学校でも やっています！



横浜市立東本郷小学校
ふじ いしょういちろう
藤井翔一郎

児童が自身の成長を実感できる 授業改善への挑戦（5年生）

本校では、令和6年度から教科書がHWGに変わったことをきっかけに、ラウンドシステムを活用した授業展開を行っています。

4年生まで聞くこと・話すことを中心に外国語活動を経験してきた子どもたちの実態を踏まえ、5年生では、Unit 3まで①ストーリーを聞いて概要をつかむ ②場面ごとの内容を理解した上で自分自身について表現する ③再び教科書に戻り②で伝えた言葉への気づきを深める、という授業を展開することとしました。教科書を何回も行ったり来たりして授業を進めていくことで、子どもたちは理解したことを自分に落とし込む時間が取れたり、学習に安心して取り組むことができたりしています。

■ラウンド1…ストーリーの概要理解

実際にUnit 1のストーリーを聞いて、大まかな内容が理解できると、子どもから「続きが気になるから先も聞きたい」という言葉が自然と生まれ、Unit 2へとつながります。子どもの思いが聞くことに生き、話の概要をつかんだり表現に触れたりすることができました。

■ラウンド2…登場人物の話を聞き、“自分だったら”を考えてみる活動

表現に何度も触れるうちに自然と子どもたちから“自分だったら”が生まれて、言語活動へのスムーズな展開へとつながりました。教科書を何度も聞く経験を通して、気付いたら言えるようになっていたと報告してくれた子もいました。子どもが自分の成長を実感し自信を持つ姿を見ることができました。

■ラウンド3…ラウンド2で伝えた言葉への更なる気づき

ラウンド2で自分のことを伝えたからこそ、もう一度教科書に戻り言葉への気づきを深め、You can do it!での言語活動へとつないでいきます。

ラウンドシステムを活用した授業を行うことで、言葉の学びが、子どもの「～したい」を大切にしたい学びへとつながってきている実感を得ることができています。さらに子どもが安心して学習に向かう土台が築かれ、楽しみながら言語活動に取り組む中で自分自身の成長に気付く機会を持つようになってきました。これからも子どもたちと一緒に楽しみながら、無理のない思考の流れで学習を進めていきたいと思っています。



※詳しい年間指導計画は
QRコードから
ご覧いただけます。



横浜市立市場小学校
ふかのみずえ
深野瑞恵

聞く楽しさから伝える喜びへ ～小学校ラウンドシステムのカリキュラム作成～

小学校英語が教科化された令和2年度は、学級全体での教師と子どものやり取り中心の授業をすることで、子どもたちは英語を聞くことを楽しむようになりました。一方で、子ども自身が話すときになると、英語をどう使って自分の考えや気持ちを伝えるのかに悩む姿が見られていました。

「無理矢理覚えさせて話させるのではなく、英語を自分の言葉として使って伝える楽しさを感じさせてあげたい。」

そんなとき、中学校の5ラウンドシステムでの生徒の姿が浮かびました。そこで、西村秀之先生からもご指導いただきながら、中学校の5ラウンドをもとに、小学校の外国語科のねらいや留意点、授業時数を踏まえた小学校ラウンドシステムのカリキュラムを作成しました。

本校では、子どもの実態に合わせ、前期はUnit 1～4、後期はUnit 5～8と分けて授業を行なっています。ラウンド1では全体でストーリーを聞いたたり、ストーリーをもとにやり取りをしたりして内容を推測します。ラウンド2では、全体または個人でストーリーを聞き、なりきりリスニングやなりきりスピーキングをしながら内容を理解します。また、登場人物と自分の考えを比べたり、登場人物と同じ場面にいたら何を話したいかを考えたりすることで、少しずつ自分のことを伝えられるようにします。ラウンド3では、登場人物が話していたことを参考にしながら、やり取りや発表などで、自分の伝えたいことを自分の言葉で表現します。ラウンド4では、これまで音声で聞いたり話したりしてきたことについて文字で読んだり、読んだ例文を参考にしながら自分が伝えたいことを書いたりします。

ラウンドシステム導入後の子どもたちの姿として、それまで以上にストーリーの内容を楽しみ、登場人物がクラスメイトかのように親しみを持っています。5年生の学習で知った登場人物についての情報を、6年生の授業で話す姿も見られています。また、英語を使って話すことを楽しみ、メモなどを用意することなく、自分が伝えたいことを楽しそうにやり取りをしたり発表し合ったりする様子が多く見られています。

5年生
年間指導計画



6年生
年間指導計画



市場小ラウンド
システムについて



※詳しい年間指導計画は
QRコードから
ご覧いただけます。



先生方の疑問に お答えします

お答えいただいた先生



横浜市立義務教育学校
西金沢学園中学部

あべ たくし
阿部 卓



横浜市立西中学校
こまつあつし
小松 篤史

Q1. 中学校では評価やテストはどのように行っていますか？

A 授業で取り組んできたことを記述のテストやパフォーマンステストで評価するのはラウンドだけでなく、ユニットごとに進める際も同じです。ラウンドでは教科書の進み方が異なるので、それに合わせて1年生のラウンド1では、リスニング中心となります。全ユニットを扱いますが、細かなことは問わず大まかに聞き取り、理解できているか確認します。ラウンドが進むにつれて、正確な理解や表現も確認しています。

K 各ラウンドの最初に生徒と目標と評価規準について確認しています。主な評価材料として、日々のスモールトークの発話やライティングしたものを中心に定期的に評価しています。ペーパーテストでは、授業で身につけた力が測れるように、初耳、初見の英文を用いて出題しています。思考・判断・表現の問題だけでなく知識・技能の問題においても目的・場面・状況があるように問題を設定するように心がけています。また基本的には、テスト形式でのパフォーマンステストや単語テストのようなものは行っていないですが、各ラウンドの最後に、目的・場面・状況を設定した言語活動を行い、そこでのパフォーマンスを評価しています。

Q2. 文法指導をどのように行っていますか？

A たくさん教科書の表現に触れている生徒は、話題に合わせて自分なりに様々な表現を使い始めます。多くの生徒が使い始めたタイミングで、教科書の表現をもとに語順や動詞の形を確認します。確認も基本的には、生徒の気付きを促すように進めています。何度も教科書の表現に触れている生徒は自分たちで教科書から必要な表現を見つけ出し、自分が使っていた形との違いに気付くことができます。

K 基本的に特定の言語材料に関する説明等の指導は、教科書の活動で聞いたり読んだりしたり、スモールトークの Teacher's Talk を聞いたり、場面や状況がある中で意味に気付けるように十分にインプットを与えた上で、インタラクションを通じて生徒に言語材料の形式に目を向けさせてから整理しています。また、産出活動で生徒が話したり書いたりしたものについて、内容面の指導をしっかりと行った上で、言語面について語句や文構造についてフィードバックをしています。

Q3. 帯活動ではどのようなことを意識されていますか？

A 教科書を扱った活動ではたくさんのインプットをしている生徒が、その表現を使ってアウトプットできる機会として会話活動を設定しています。アウトプットが正確な形になるまでには時間が必要ですので、1回1回の会話活動では、生徒も私自身も楽しんで行えるように、内容中心で進めています。中学2年生の秋頃から読解力もつけられるように、初見の文章を読む活動も行っています。

Q4. ラウンドシステムを実施されている上で 気を付けていることはありますか？

K ラウンドの活動が活動ベースにならないように気を付けています。そのラウンドでどんな資質・能力を育むのかを意識して授業をしています。例えば、ラウンド2の音文字一致では、文の並べ替えを正解することを目的とした指導にならないように気を付けています。そのため、ラウンドの終了時にはまとめとして、目的・場面・状況のある言語活動を行い生徒が育んだ力を使ってチャレンジするような活動をしています。

また、ストーリーを理解していく上で、繰り返し教科書のストーリーに触れていながら徐々に概要から詳細へ着目できるように、前半のラウンドの方ではあまりストーリーの詳細については確認しないように心がけています。

Q5. どうしてラウンドシステムに挑戦してみようと思ったのですか？

K 始める前は、生徒が英語を学ぶことに対して関心や意欲がなく、授業中は説明を聞いている時間が多く、活動をしたときもやらされている感が伝わってくる様子でした。自分自身も英語の文法を教えることが中心となり、英語を使ったやり取りや言語活動の時間を取ることが少なくなっていました。ラウンドを取り入れたいちばんの理由は生徒が活動する時間を増やしたかったからです。ラウンドをスタートした時には、教師が話す時間が少なくなり、生徒が活動する時間が増えました。また、ラウンドの活動とスモールトークを行ったり来たりすることで、生徒がコミュニケーションを取るための語彙や表現など知識面についても自ら獲得しようとする姿が見られるようになりました。

Q6. ラウンドシステムの魅力は何ですか？

A ラウンドの授業に10年間以上取り組んできましたが、生徒自身がたくさんの活動に取り組み、大量のインプットを通して、少しずつアウトプットが形になっていくラウンドに現在も可能性と魅力を感じています。授業スタイルは一見真似しやすいものとなっていますが、それぞれの学校の生徒に合わせて授業改善していくことも必要となっていて、教師冥利に尽きる面もあります。引き続き目の前に生徒の力がついていくように、授業づくりをしていきたいと思っています。

編集部より

光村図書の英語教科書は、小中ともに「言葉と心が離れない学び」がコンセプトです。『COLUMBUS』の時代から、英語の学びが記号の置き換え作業になるのではなく、言葉の使用場面や文脈、話し手の気持ちに重点をおいた内容理解と表現活動を大切にしてきました。『Here We Go!』になってもその根幹は変わることなく、これからも「ストーリー」を中心に据え、子どもたちが英語で自分の考えや気持ちを伝えるコミュニケーション活動に夢中になれる環境を整えることが私たちのよろこびです。長年に渡り弊社の英語教育観に賛同の意を示し、共に歩んでくださいました先生方に篤く御礼申し上げますとともに、今後ますますのご発展を心より祈念申し上げます。

中学校英語教科書 編集部
編集長 遠山 潤



「子どもたちにとって、教科書に出てくるショウタやユイは、英語をいっしょに学ぶクラスメイトのような存在になっています。』『Here We Go!』のキャラクターやストーリーの魅力として、このような言葉をいただくことがあります。このとき、よろこびとともに実感するのは、「先生こそが、キャラクターを生き生きとした存在に育ててくださっている」ということです。英語を学びはじめの子どもたちに彼らが迎え入れられるよう、関心を引き出す問いかけや、理解を深めるやり取りを工夫されている様子が、お話から伝わってくるのです。その取り組みを楽しそうに教えてくださること、そのような先生が数多くいてくださることが、私たちの教科書作りの大きな原動力となっています。

小学校英語教科書 編集部
編集長 戸田佐恵



光村図書ウェブサイト



LINE 公式アカウント友だち募集中！



授業づくりに役立つ情報を、いち早くお届けします。



QR コードは、(株)デンソーウェブの登録商標です。



光村図書

発行人 吉田直樹

発行所 光村図書出版株式会社

〒141-8675 東京都品川区上大崎2-19-9 電話：03-3493-2111

デザイン mg-okada

写真 長岡博史

教授用資料

本資料は、一般社団法人教科書協会が定めた「教科書発行者行動規範」に則って作成したものです。